SUWA.R.C WEEKLY

＜週報№2,871＞　2,982回例会
２０１９年２月２２日（金）
■会長／古屋　了　■幹事／加藤　明博

◆司会＝伊藤武利ＳＡＡ

◆ゲストビジター＝本日はいらっしゃいません

◆出席報告

本　　　日	６８．２９％	１８名欠席
前回訂正	８８．８９％	６名欠席

◆ラッキーナンバー＝№.7　山田文雄君

◆ニコニコボックス＝●古屋了君、加藤明博君＝本日は宮坂会員の卓話です。●小平直史君＝本日は国際奉仕委員会の担当例会で、真澄の宮坂さんに卓話をいただきます。●宮坂直孝君＝超連続欠席申し訳ございません。本日拙いプレゼンをさせていただきます。●玉本広人君、山田文雄君＝本日委員会構成を配らせていただきました。ご協力をお願いします。●北川和彦君＝アーク諏訪が開店しました。駅前が活性化することを祈っています。●山田文雄一君＝ラッキーナンバーにあたって。

◆会長告知・古屋了会長＝藤原正男さんの従軍時代のお話です。藤原さんは学徒出陣の一年前に慶応大学を繰り上げ卒業で富山連隊へ応召されました。連隊では馬を与えられ、寒さに震え、馬糞の温かさに手を突っ込みながら世話をしていたところ、突然陸軍中野学校入校を命じられたそうです。当時、諜報員は六大学から英語と体育ができて軍人っぽさのない、民間人らしい学生が選抜されたようです。立川周辺で短期間諜報員としての訓練ののち、呉軍港から同期 5 名とインドネシアへ派遣されました。ところが、生き残ったのは近衛師団の通信兵として軍服を着用する立場だった藤原さん一人。私服の諜報員として民間へ放たれた 4 名は殺されたり、現地に帰化するなどして帰って来ませんでした。後年藤原さんはこの運命を通じてご家族に、「人生は、ふりかかってきたことに対して策を講じない方がよいことが多い。私心にとらわれず流れに任せることも大事だ。」と語っておられたそうです。また、戦後暫く経ってから偶然テレビ映画で「ビルマの竪琴」を見て「大変なものを見てしまった。」と顔色を変えたことがあったそうです。スマトラで連隊長に従って女性や子どもの捕虜収容所を視察した時、「この子だけは助けて！」と病気の子どもを差し出す母親に目を合わせることができなかったと悔しさをにじませていらっしゃいました。敗戦を迎えたのは北スマトラでした。「まだ余力がある。」と徹底抗戦論も強かった混乱の中、いざという時のため機密書類をドラム缶に入れて海に捨てる等の終戦処理をしていた時のこと、連合軍から戦後の治安維持の特命を帯びて一人颯爽と落下傘降下をしてきた英国空軍のジェイコブズ少佐をメダン飛行場に迎え、参謀本部に繋ぎます。このジェイコブス少佐と 35 年後に再開したお話は、ジェイコブズ少佐の小説「モンスーンへの序曲」で、藤原さんのあとがきに綴られています。終戦前のこと、捕虜となったイギリス人将校のトムさんと人生や未来について語り合うほど仲良くなったのに、その銃殺に立ち会わねばならなかったことがありました。しかし終戦後、ジェイコブズ氏による終戦処理の中で、逆にトムさんの銃殺を指示した参謀長が処刑されたそうです。幸い前線行きを免れたとは言うものの、藤原さんの体験は尋常ではなかったはずです。しかしこの間冷静でいられたのは学生時代に自由主義の経済学者河合栄治郎の「学生に与ふ」を読んだおかげだと語っておられたそうです。藤原さんがその後も、一貫してリベラリストとしての思索と国際交流の活動を続けられた原点はここにあるようです。終戦処理の過程では冤罪も多く、復員後結婚されてからも暫くは、戦争の影に怯えていたとのこと。そんな藤原さんの精神に穏やかさが訪れたのは、初めて子供が生まれた昭和 24 年です。お嬢さんとの初対面のために朝 4 時、わざわざスーツに着替え、和世さんとの初対面を果たしたそうです。藤原さんはそんなジェントルマンでした。

◆幹事報告・加藤明博幹事＝①3 月 1 日は 1 月に予定していた諏訪市長の年頭所感です。8 日はアクトとの合同の夜間例会です。②3 月 9 日に行われる IM は現在 18 名の参加を頂いていますが、多くの方の参加をお願いします。③先週おはかりした新入会員の方は異議の申立てが無いため入会の手続に入らせて頂きます。

◆第 2600 地区来期役員委嘱状の交付式

小口武男会員・会員増強委員会

◆クラブフォーラム・国際奉仕委員会小平直史委員長＝

当会の会員には自社で海外に製造工場をもって雇用を産み税金を納める方もお出でで、これも国際奉仕ですが、他方では海外から年に３０００万人の外国人が国内に観光に来る時代で、国際奉仕は益々重要になっています。本日は早くから世界戦略を計画し実践されている真澄の宮坂会員にお話しをしていただきます。

◆宮坂直孝会員＝当社は１６６２年創業、今年で３５７年目です。祖父、宮坂勝が大正初期から美酒を求めて全国行脚し、品評会での一等受賞、７号酵母の発見など品質革新を、父の宮坂和博が製造と販売の近代化で営業革新をしてきました。私は、「上質な真澄を最適な状態で提供する」「食卓を和やかに、街に賑わいをもたらす」「日本酒を世界酒に」という４つの夢をもってやっています。すべての製品を諏訪蔵と富士見蔵で自社生産し、一升瓶換算で年間７５万本を生産、諏訪と香港に営業拠点をもち、従業員は７０名、県内４９％、県外４３％、海外８％の売上です。

３０年前に諏訪の造り酒屋は国際化が最も遅れていると言われたことがありますが、海外展開は１９８５年からです。この時は米国で販売しようとツアーを組みましたが、劣悪な品質管理と、売る人も買う人も日本人で幻滅し、輸出放棄宣言をしたほどでした。その後地酒ブームが一服して売上が伸びず、原価・経費は上昇するなど絶望感にさいなまれる日々が続きました。

転機は１９９５年で、某蔵元の勧めでフランスのワイナリー見学をしました。欧州のワイン業界は日本酒よりはるかに厳しい競争環境にありました。しかし高品質と個性化へのこだわり、酒蔵の観光化によるファン作りと地域貢献、価値を認めてくれる国への輸出などを学ぶことができました。

その後、チャンスがあれば欧州のワイナリー見学、イベント、香港、台湾のデパートの催事に参加してきました。見学中心で売上は皆無。バカ息子、外国かぶれと揶揄されましたが、アイデア、情報、人脈は蓄積できました。

１９９９年、ＶＩＮＥＸＰＯ（2年に１度開催されるワインの国際展示会、フランスボルドー）に日本酒メーカーとしてはじめてブース出展しました。２５００社、５日で５万人のワイン業界の人が参加する展示会です。

トラブルだらけ、言葉の壁のつらい日々でしたが、日本酒は世界に通用するという確信がつかめました。

帰国後、通訳探し、広報用のパフレットやビデオの作成、一緒に出展する仲間捜し、公的補助金もお願いしました。

２００１年に２度目のＶＩＮＥＸＰＯへの挑戦。６蔵が出展しましたが、日本酒ブースは大盛況で次々に商談が成立、メディア取材も多数、航空会社、ワイングラスのトップメーカー等が支援者になってくれました。その後毎回出展しています。

２００１年に突然我が社を訪れたクリス・ピアス氏という米国人に説得されてアメリカに進出したところ、販路がたちまち拡大し、ＷＳＩ（ワールド・サケ・インポート）社と出会いました。

同社の販売モデルは、「高品質銘柄のみの品揃え」「在留邦人でなく現地人市場へ」「大都市に集中」「こだわりレストランだけ」「レストランスタッフへの徹底した商品教育」で、当社もこれをモデルにし、ようやく売上が上がるようになりました。

主要輸出先は、米国３４％、香港１８％、カナダ１２％、スウェーデン５％、デンマーク３％で、３年後には中国が１位になると思います。

日本酒のお客様は世界中にいます。正しく取り組めば売上も利益も伸び、農業振興など他の産業にも貢献でき、日本の食文化を世界に押し出す力にもなり得ます。最近は業界全体で輸出が１２０％で推移し、「日本酒コンテスト」「外国人の酒蔵見学」「海外で日本酒を造る動き」「コンサルの依頼や共同事業の提案」などが急増しています。これからも夢をもって経営していきたいと思います。

◆今後の例会日程

３月１日	金	ｸﾗﾌﾞﾌｫｰﾗﾑ（諏訪市長、年頭所感）
３月８日	金	ｱｸﾄ合同例会（青少年奉仕委員会）
３月 15 日	金	ｸﾗﾌﾞﾌｫｰﾗﾑ（ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ委員会）
３月 22 日	金	準法定休日

執筆担当　北川和彦